

関川しな織の里・つるおかユースホステル子ども体験活動取材記

伊藤健吾（山形大学農学部1年）

早坂麻衣（東北公益文科大学1年）

1、しな織の里づくり活動と交流学習会

・団体データと取材日程

名称	関川しな織協同組合
住所・連絡先	〒999-7315 山形県鶴岡市関川 2 2 2 (0235)47-2502 ファックス FAX : (0235)47-2333
会員など	関川地区 40 戸の住民など
主な活動分野	伝統工芸品「しな織」を通した子どもの体験学習活動等

実施日時 11月23日から11月24日
 実施地区 鶴岡市関川地区
 活動運営 関川しな織組合と
 NPO 法人里の自然文化共育研究所

活動内容

11月23日

曹源寺見学

長倉の大杉今熊神社にあった鐘の見学



曹源寺の見学



しな織センターにて講演

講演 関川しな織組合組合長

五十嵐 嘉一郎さん

- ・しな織に関する話
- ・しな織が出来るまでの工程

ビデオ鑑賞

しな織センターの見学

しな織工芸品や展示物の見学

講演会



地元の方との交流会

金沢屋旅館にて夕食を食べながら

私と地元の方との会話

- ・大学のこと
- ・木を使った生活のこと

11月24日

関川地元学

関川地区内の散歩

しな織体験

コースターの製作

子どもたちの声

「しな織は難しい」

「もう一枚織りたい」

しな織センター見学



交流会 地元の方の話



11月24日

- ・朝食
- ・金沢屋旅館出発
- ・関川地区内の散歩
- ・しな織センター到着
- ・しな織体験
- ・しな織センター出発



関川地区内の散歩 子どもたちの話



感想



2、つるおかユースホステルの子ども体験活動

・団体データと取材日程

名称	つるおかユースホステル(菊池良磨氏)
住所・連絡先	〒999-7463 山形県鶴岡市三瀬宮の前 1-1 TEL:0235-73-3205
会員数など	ペアレント：菊池良磨氏
主な活動分野	森の人講座、マクロビオティックなどの活動を展開



実施日時 11月24日から11月25日
 (しな織の里づくり活動との交流学習会から続いて行われた)
 実施地区 鶴岡市三瀬地区
 活動運営 つるおかユースホステルと NPO 法人里の自然文化共育研究所

活動内容

11月24日
 農業博物館見学
 加茂水族館見学

農業博物館見学



つるおかユースホステル到着
 「お釈迦さまの湯」へ行き入浴

夕食 マクロビオティック食育講座

- ・玄米ご飯、地元でつくられた野菜を使った料理
- 子どもたちの評価
- 「おいしい！」
- 「これはちょっと...あげる、食べて」

マクロビオティック食育講座



森の人講座

外国のビデオを鑑賞（森作りのビデオと環境破壊のビデオ）

11月25日

三瀬の源流探検

水無集落上流の自然観察会

三瀬の源流探検と海辺の散策



昼食 知憩軒

- ・自家栽培、庄内産の食材でつくられた田舎料理
- ・絹織物の見学

知憩軒



ぶどう園見学

無農薬ぶどうの収穫
子どもたち 「甘い!おいしい!」

ぶどう園



活動の追跡レポート（文：伊藤健吾）

11月23日

温海町にある曹源寺というお寺を見学しました。なぜ始めにこのお寺を見学しに来たのか、その理由は写真に写っている鐘です。連れてきていただいた菅原さんはこう話してくれました。「今日一番最初にここに来たかと言うと、後ろ、あの鐘が長倉の大杉今熊神社にあった鐘なんです。歴史上いろんな荒波を乗り越えてなぜかあつみ町に鐘が着ている。あとで椅子にあがってみてもらんですけど、角川村斉藤なんとかと名前も書かれていますから。そういう意味で戸沢村とあつみ町をつなぐ貴重な鐘ぜひご覧いただきたい。」話を聞いたあと、子どもたちは須田さんに肩車してもらって見ていました。見えた子は、「書いてある、角川村、降りる瞬間に見えた。」と話していました。



お昼ご飯を食べた後、関川地区へ移動しました。関川しな織センターへ行き、関川しな織組合の五十嵐さんから、雑談をまじえながらしな織に関するお話を聞かせていただきました。「しな織」とは、山に自生する科（しな）の木から取り出した繊維で糸を作り、布に織りあげたもので、衣服や装飾品として利用していました。しかし、明治以降綿製品の発達から多くの地域で生産されることは少なくなりました。今回体験活動を行う、鶴岡市



関川地区では、魚網や農作業など日常生活で幅広く利用されており、現在も伝承文化として受け継がれています。また、「しな織」は、日本三大古代織の1つとされています。

「最初にしな織とは何かということについて話したいと思います。これはまず、一番のことは古代の織物。皆さんは服を着ているわけですがこれは現代の織物です。古代の織物。古代っていつかということ私もはっきりとわからない。大昔のことを古代と読んでいるわけです。大昔から織られている織物。それでたいていのものはいつの時代にどこから流れてきて引き継がれてきたという歴史があるんですけど、しな織にはないんです。それだけ古いものだと言えるのではないかなと。」という、しな織の歴史についてのお話や「しなの木であればどんな木でも良いのか。小さい木でも、大きい木でも使えるかということ、そうじゃないんですな。せいぜい年数で言えば15年から20年くらい。太さ的には根本で、6年生と言うと12歳ですね。皆さんがしなの木であれば、そろそろ切ってもいいんですな。ま

「ず15年という中学生ですね。そのくらいになると、ちょうどいい木になるんですね。」
 といったしな織に使われる材料、しな織センター誕生のいきさつなど話してくれました。
 私の印象に残った話は、「しな織りを売ったお金は、お母さんたちの、自分で使えるお金。
 そのお金は、おやじにやらなくていい。そのお金は全部自分のお金。自分の服を買ったり、
 子ども服を買ったり。そういうやり方。非常に張り合いがあった。頑張りがいがあった。
 他の村ではそういうことはないです。関川だけです。そこが関川のおやじたちが頭が良か
 った。そういうやり方がよかった。それはやっぱり今も続いている。たとえば、おばあち
 ゃんが、かなりの金になりますから、孫が大きくなって、自動車の免許をとるとなったと
 きに、おばあちゃんが自動車学校に行くお金をぼんと出してくれるんですね。そうすると、



孫はすごい喜ぶわけですね。そして、今度免
 許を取ったときに、病院に行くときは連れて
 行くと。こういうことで家族の関係は上手く
 いく。老人の生きがい。家族の仲良く暮らす
 ということに大きな役割を果たす。やっぱり
 うちのほうではしな織りを。けっこうお嫁さ
 んがくるんです。若い人はほとんどお嫁さん
 をもらっています。鶴岡とか温海の方からお
 嫁さんを連れてくるんです。そうすると子ど
 もも生まれる。今、関川は旧温海町の中では

トップクラスです。子どもの数。このくらいの年代の子どもも。います。そして、お嫁
 さん来た人たちは、こんな山の中でコンビニもなくてと言いそうなんですけど、言わない。
 むしろ、鶴岡なんかに行きたくない。われわれが聞くと涙が出そうなくらいうれしい話な
 んですけど。そういうことで、若い人はわりと鶴岡にでるひとはいないです。老人の生き
 がいと、家族もまとまっていく大きな力をしな織りは持っている。それが今の関川からし
 な織りがなくならない要因。非常に力になっている。」という話です。

このあと場所を移動して、実際に使われているシナノキ樹皮や紡いだ糸を子どもたちに見せながら、しな織を製作するまでの工程を説明してくれました。最後にしな織の製作風景を記録したビデオを見ました。

そのあとにしな織センターの見学をしました。
 きれいな色のしな布がたくさんありました。
 「染めるのですか？」と聞いたら、「はい、
 製糸してから染めます。」とっていました。
 また、ここには猟銃も飾られていて、私が眺
 めていると、男の子たちが来て「この銃本物
 かな？」と聞いてきました。「本物でしょ。」
 と答えながら近くの熊の剥製へ目を移すと、
 今度は「熊汁食べたことある？僕あるよ。」と



話をしてくれました。

夜の交流学習会はその日の宿の金沢屋旅館で、夕食を食べながらしました。その中で地元の方と話をしました。私が「大学で学べないことを学びにきた。」と話したら、地元の方たちは「こういうことをたくさん学ばないとだめだよ。」と相槌を打ってくれたし、「今の生活は贅沢だ、じきに木材燃料が見直される時代が来る。」と地元の方が話せば「私もそう思います。」と話が合い、意気投合しました。



11月24日

金沢屋旅館を出てから関川地区内の散歩をしました。雪が積もっていました。2班に分かれました。そこで子どもたちといろんな話をする事が出来ました。自分の将来の夢を話してくれました。「野球がしたい」子、「理科系の学校へ進学したい」子、様々です。私にも質問したいことがあったらしく、「大学ってどんなところですか?」、「得意なスポーツはなんですか?」など、いろいろ聞かれました。会話は絶えなかったです。



関川地区には薪を使っている家がたくさんありました。家の軒下に積まれた焚き物は無駄なく積まれていて、地元の人たちが山と暮らしてきたことを物語っていました。左の写真は子どもたちが雪の積もった坂道を転がっている写真です。冷たい雪の上でも、元気良く転げまわっていました。

そしてしな織センターへ行き、しな織体験をしました。10cmぐらいのコースターを織らせてもらいました。子どもたちに「上手に出来るか。」と聞くと、ほとんどの子は「難しい、上手いかない。」と言っていました。がなかには、「楽しい、面白い」と言っていた子もいました。



織れたものを見せてもらおうと、上手に出来ていたので感心しました。私もコースターを織らせてもらいました。作業は楽しかったのですが、コースターは作りが雑になってしまいました。子どもたちの言ったとおり、難しいなと思いました。また、そこには炭の飴が売っていて、みんなで分けてくれとあって、3袋も買いました。「なめると口の中が真っ黒になるよ。」と聞いた子どもたちは、飴をなめたあと互いに口の中を見せ合って、「本当だ、黒い！」とはしゃいでいました。

最後に子どもたちから関川しな織センターの人たちにお礼の挨拶をして、記念撮影をして、関川地区をあとにしました。今回の体験で作成したコースターは後ほど郵送で送ってもらえるそうです。



地域の人々の活動に対する考えについては、関川しな織組合の五十嵐組合長さんの話しのなかに、地元の人達に関する話が出てきました。その話によると、「しな織センターと言う建物が、昭和60年に建てられた。それで、当時今は、ずいぶんこう田舎から鶴岡とかに、皆さんのほうであれば新庄にでていって過疎化というのが非常に問題。うちのほうでもしな織センターを建てるまでは、鶴岡に何軒か引っ越した。村の人に聞いてみると、私も将来は出て行きたいと。これからの関川はどうなるのかと心配になった。当時村づくりが非常に言われていた。何とか村づくりをしなければという危機感があった。それじゃどうしようとなるんですけど、私たちの村も村の話合いのなかで、話をしたんです。なかなか名案と言うのがでてこない。だが、関川では前



にも申し上げたように、しな織というものが全戸でやっている。たとえば村おこしでやっていると言っても、田んぼがない家もある。こういう場合は村としての村づくりは難しい。ところがしな織は全戸でやっている。ということでしな織をやろうかというときに意思統一がやりやすかった。みんなでやろう。おれは関係ないというのがなかった。ということで、しな織をやろうと。みなさんから賛成を受けた。関川ではしな織で村おこしをやろうという意見の一致。何をやるかという、当時関川では公民館という村の公民館というのがあったんですけど、公民館をもっと新しく立派なものを作りたいというのもあったんで

すけど、その話としな織で村おこしをしようと言うのがちょうど重なったので、しな織センターと言うものを立てて、それを公民館としても使おうということになった。公民館建設というか、しな織センターを建てると言うことがこの難儀した。新しい建物を建てると言うとお金もかかる。幸い村の人からの賛成を得て、昭和60年に、それでしな織センターを建てたと言うことが、しな織を続けていく継続していくというのにすごく大きな役割を果たしている。あるいは関川公民館という名前で建てていたら今のしな織はなかったと私は思う。あのときしな織センターとして建てたということが今のしな織につながっている。ただ、やっぱり村の人はだいぶの人は公民館を立てたと。われわれの両方使うと。公民館を建てたんだから、しな織をやっても、しな織センターとして建てたものですから、しな織をしなければいけません。国の検査もした。そういうことで、村の人とのギャップというのもあって後で苦しんだんですけど、今となれば、村の人もしな織センターを建てたことで失敗したと言う人はいないので良かったんですけど」ということでした。しな織組合の活動は村おこしから始まっていて、成果もあげているため、多くの人から理解を得ているようです。

関川をあとにして、まず松ヶ岡開墾記念館へ行きました。ここで昼食を食べたときに、子どもたちが自己紹介をしてくれました。そのあと角川小中学校での生活について話をしてくれました。農業博物館の見学では里の自然学校の岩雄さんが講師となって、農具の名前やどういう仕事で使ったかを子どもたちに教えていました。回転式の稲漕ぎ機を見つけると「これ知ってる、使ったことあるよ。」と、子どもたちが使い方を身振り手振りで表していました。回転式の稲漕ぎ機は、私も小学校のときに学校の授業で米作りをしたとき使いましたが、この子たちも使ったことがあるという話を聞いて、私たちの頃から変わらずに行っている授業があるんだと思いました。



そのあと加茂水族館へ行きました。加茂水族館は、くらげで有名な水族館です。魚もたくさんいましたし、ふれあいコーナーとっているんな海の生物に触れる場所もありました。また私たちが着いたときには、アシカショーをやっていて、子どもたちは急いで見にいっていました。私は水族館と言えば海の魚しかいないと思っていましたが川の魚もいたので、高校生のと



きに良く遊んだ川でたくさん泳いでいた川魚を
思い出し懐かしく思いました。

加茂水族館を見た後、つるおかユースホス
テルへ行きました。荷物を置いてすぐ「お釈
迦さまの湯」へ行きました。ここのお湯は子
どもたちには熱かったらしく「熱い！よく入
れますね。」と言われました。



帰ってきて夕食です。「マクロビオティック
食」でした。「マクロビオティック食」とは、
体と自然に優しい食として、人工調味料や香
料を使わず、素材も安心・安全なものを使用
し、素材の味を楽しむ食事のことです。その
起源は日本人の野菜中心の食生活（日本食）

にあり、それが海外の国で「マクロビオティック食」という言葉で表現され、日本に入
ってきたそうです。近年は特に、BSE問題や鳥インフルエンザ、中国製の輸入食品など、
食や素材の安全性について様々不安があり問われている時代です。どんな食が美味しく安
全なのか、今一度考えてみる時期にきています。そこから、今までの食事がどのようなも
のだったのかが見えてくるかもしれません。食べながら、ユースホステルの菊池良磨さん
がマクロビオティック食について話してくれました。「マクロビオティック食はとても体に
いい食事で、この食事を続けて末期ガンが治った方もいます。」「調味料はほとんど使っ
てないです。」「料理に使っている玄米や野菜は地元で作られた無農薬の野菜です。」といっ

た、マクロビオティック食の良さを話してくれ
ました。主食は玄米です。カレーが出てきまし
たが肉ではなく、大豆が入っていました。肉も
魚も使っていないのにカツが出てきました。大
豆で作ったのかなと思ったのですが、「ふ」で
作ったと聞いて「ふ」がこんな食感になるんだ
と驚きました。子どもたちはおかわりする料理
もありましたが、料理の中には苦手なものもあ
ったそうで、「これ代わりに食べて下さい。」と
私のところへ持ってくる子もいました。ご飯を



食べた後、森の人講座ということで、海外で作
られた環境問題を考えるビデオを二本見ました。一つは山や川を壊して大都市が造られる
内容で、最後は再び山や川に戻っていくというものでした。もう一つは一人の男が荒地へ
森を造っていくというものでした。どちらも、最終的には自然豊かな森や山や川になりま
す。そういう自然環境を残して守っていくのが山にかかわる人のこれからの仕事なのかな
、と思いました。

11月25日

朝食もマクロビオティック食でした。主食はやはり、玄米です。味噌汁やひじきと大豆の煮物など、植物由来の食べ物を食べました。また味噌汁も塩分は控えめでした。



そして三瀬の源流探検へ行きました。その前にユースホステルで菊池良磨さんから「木霊」の話の話を聞きました。「木霊とは森にいる精霊のことです。」と言いながら木霊の写っている写真を見せてくれました。「木霊は心のきれいな人

にしか見えません、みんなには見えるかな。」そんな話をした後、源流へ向かいました。林道の途中まで車で入り、そこから歩いて源流へ向かいました。源流までの道のりにはいろいろな草木が生えていました。ユースホステルの菊池良磨さんは、その草木の名前やどんなことに利用していたのか、などを子どもたちに教えていました。菊池さんはいろいろなことを知っていてすごいなあ、と思いながら説明を聞いていました。また、杉林の近くに玉切りされた丸太がありました。菊池さんは「この木はそこの杉林からおじいさんが伐って運んできたんだけど、売るとなんぼぐらいになると思う？二束三文ぐらいにしかないそうだよ。」と話してくれました。その話を聞きながらやっぱりまだ日本の林業・木材業界は厳しいんだなあと思いながら、自分の働く時には少しでもよくなっているといいなあ、と考えていました。

そこからしばらく歩いて、源流へ出ました。まず、水を飲みました。うまかったです。また、水の出ているところが数箇所あり、各々水の味が違いました。菊池良磨さんが「その水の中にどのくらい手を入れていられるかな。」と子どもたちに言いました。子どもたちは源流の中へ手を入れて試してみました。みんな冷たくないそうで、60秒ぐらいまで数えてから終わりにしました。この水はとても冷たいそうで、夏でもそんなに長く手を入れていられないそうです。子どもたちは平気そうな顔をしていましたが、手は赤くなっていたのでちょっと我慢していたのかな、と思いました。

源流の上には立派な杉の木が一本どっしりと構えていました。その杉の木を見て子どもたちは「すごい、大きい。」「樹齢何年ですか。」と聞いていました。500年から600年くらいだそうです。幹周りを囲もうとしたのですが子どもたち全員でも囲むことが出来なくて、大人の方も加わってようやく囲むことが出来ました。菊池



良磨さんが「木の幹に耳を当てて静かにしていると木の声が聞こえるよ。」と言ったので、みんな静かにして杉の木へ耳を当てていました。その杉の巨木の下に、小さな杉の子がひょっこり顔を出しているのを私は見ました。杉の子と杉の巨木を見て、この三日間の体験活動の中で、角川の子どもたちと関川の方々や里の自然学校の人たち、ユースホステルの菊池良磨さんが一緒に活動している姿を思い出していました。子どもたちは大人やお年寄りからいろいろなことを学び、少しずつ次の世代を担う大きな巨木へと成長していく、三瀬の源流も同じだな、と心の中で思いながら杉の子に「立派に育てよ」と声をかけて源流をあとにしました。

その後海へ行きました。角川には海がないので子どもたちは大はしゃぎで海の方へ走って行きました。出川さんたちは海で釣りをしていたのですが、釣果はなかったそうです。最後に海で記念撮影をして三瀬をあとにしました。

昼食は知憩軒で食べました。この店も、マクロビオティック食ではありませんが自家栽培の野菜と庄内産の食材を使い、素材の味を生かした田舎料理を食べられるお店でした。囲炉裏が切った座卓で食べる素朴な料理は、趣があってとても良いものでした。一緒に座った男の子たちも「おいしい！うまいなあ。」と食べていました。知憩軒では絹織物も織るそうで、機織の機械や織物を見せてもらいました。知憩軒の方の話では「ここでは勤務時間は決まっています。自分の好きな時に織りに来ます。そのため主婦や身体障害者の方に人気があります。」と書いていました。しな布もきれいでしたが、絹織物もきれいだなと思いました。



最後にぶどう園に行きました。もうぶどうの出荷時期は終わっていらしく、ぶどう園の主人の方は「今木になっているのは商品にならないものだから好きなだけ持っていいよ。」とってくれたので、みんなでぶどう狩りです。無農薬で栽培をしているようで、洗わずに食べることが出来ました。とても甘くておいしかったです。子どもたちも夢中でとって、高い所にあるぶどうを指さして「あれとって下さい」と言われたのでとってあげました。そして三日間の活動を終わりました。



帰りはユースホステルの菊池良磨さんに送ってもらいました。そこで私は「この生活って大変なんじゃないんですか。食べていけるんですか。」と聞いてみました。すると菊池さんは「生活は大変。けれど、この仕事は自分が好きでやっているから毎日が楽しい。地元の人とも仲良くなれるしね。」と言っていました。彼の活動を応援してくれる地元の方たちは多く、それはきっと大学時代からユースホステルを利用していた



という菊池良磨さんが長い時間をかけて得た、地元の人たちからの信頼があってこそ思いました。だからこそマクロビオティック食に地元の野菜が使えるのだと思いました。

最後に三日間一緒にいた子どもたちについて思ったことを書きます。角川の子が初対面の人とこんなに話せることに驚きました。自分は子どもの時年上の人と話すのは苦手でしたから、なおさらです。やはり角川小中学校や里の自然環境学校といった、年齢の違う世代との活動をたくさんしてきたからでしょう。こういった活動は大切なことだと思いました。こういった活動はなかなか出来るものではないのでしょうか。教える人、教わる人、二者をつなぐ人が揃って初めて行動が出来るようになります。だからこそ角川の里には、これからもこういった活動を途絶えさせず、続けていてもらいたいです。



報告者

伊藤 健吾

山形大学農学部1年

長野県出身



大学では学べない現場の仕事を見たくて、いろんな所へ首を突っ込んでいます。山師の師匠の元で、山仕事の修行中。

里山と里海、多様な山形の自然と文化からのまなび
～関川しな織の里とつるおかユースホステルの活動より子どもたちの感想集～
(報告者・早坂麻衣)

< 23日 >

お寺見学

どうやってここまで鐘が来たんだろうと思った。
近くで見たら鐘に文字が書いてあった。

昼食

カツ丼・天丼どっちもみたいでおいしかった。
ボリュームがあったし、おいしかった。

しな織センター見学・公演

しな織の糸を作るまでが大変なんだなと知った。
木から糸をつくるのがすごいと思った。



夕食(金沢屋)

角川とは違う郷土料理もおいしかった。
山・海どっちもの食べ物があった。



< 24日 >

関川地元学

すごく寒かったけど楽しかった。
薪を使っている家がたくさんあった。

しな織体験

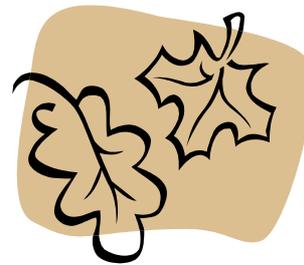
10センチ織るのにすごく時間がかかった。
きれいに織るのは難しかった。
慣れてくるとだんだん楽しくなった。



農業博物館

農業に使う道具がこんなにいっぱいあると知らなかった。
見たことがある物もあったし、何に使うのが全然わからない物もあった。

ユースホステル着



海辺の「森の人講座」

ユースホステルは世界中にたくさんあるんだ。

夕食(マクロビオティック)

初めて玄米を食べた。

ふのカツがお肉みたいで美味しかった。

肉も卵も使っていないのがすごいと思った。



< 25日 >

自然体験:源流探検

昼食(知憩軒)

野菜の料理なのにすごく美味しかった。

自分で焼いたりして楽しかった。

ぶどう園見学

農薬を使っていないのがすごいと思う。

今まで食べたぶどうの中で一番甘かった。



取材を通して：

ふるさとに根ざした活動は、子どもたちの心に素直に響くことが、声を収集していて強く感じました。子ども達の感性を育てるこうした活動の数々がますます元気になっていくように、私もこれから何か活動ができればと思いを新たにしました。これからも里に根ざして暮らす人々との出会いを大切にしていきたいと思います。